

病院年報（平成18年度）：国際保健医療科

1. 国際保健医療科の沿革と現状

平成6年（1994年）10月に佐久総合病院の地域医療や農村医学研究の経験と成果を生かして、国際協力活動を進めるべく設立された。平成12年には、前清水院長によって定められた新しい病院理念と行動目標に、国際貢献と国際協力が詠われた。平成14年より、国際協力機構（JICA）プロジェクトやJA全中と協力して、フィリピンのベンゲット州において八千穂村をモデルにした健康管理活動を実施しているが、本活動は平成18年度現在まで、5年間継続されている。ベンゲット州の北隣のマウンテン州でも、平成16年3月より、巡回型健康管理活動（CHOP：Community health Outreach Program）が実施されている。これらの活動主体は、途上国から佐久病院を研修員として訪れた人々である。フィリピンでの活動は、農村保健・医療分野の国際協力の事例として、研修のフォローアップとして実施されたものであり、国際協力の進め方として、ひとつのモデルである。各国から佐久病院を訪問した研修員を通じて各国に紹介している。平成18年度も、JICAプロジェクトのカウンターパート研修や集団研修プログラムなど、途上国からの地域医療・農村医療に関する多くの研修員を受け入れ、JICA専門家派遣の機会等を利用して、研修フォローアップを継続している。平成17年度よりの国際医療協力班、“途上国における社会開発、地域保健システム強化に関する研究班”は、平成18年度も、病院と地域との連携強化をテーマにフィリピン、ベトナム、ラオス、セネガルなどで研究を継続した。

2. 平成18年度活動内容

2. 1. 途上国からの研修員受け入れ

国際協力機構（JICA）やJA全中、農村医学会などとの連携を通じて、引き続き海外からの視察者・研修員を受け入れ、外国人視察・研修員の累計は、101の国と国際機関から1223名になっている（図1）。研修員に同行して、国内の国際保健協力関係者も多数来院していて、国際協力に関係する多くの国内機関とも協力関係にある。1999年から2006年の研修視察者は、67カ国から420人で、81%がJICA関係の地域保健・農村医療の研修目的であった（図2）（図3）。研修受け入れには、佐久病院の各部門からの協力を得たほか、八千穂村、北相木村、川上村などの地方自治体、JA佐久浅間農協、臼田小学校など、地域の関係諸機関と連携し、佐久地域全体の保健医療システムや活動が理解できるような研修モジュールによって実施している。研修目的にそって、途上国の保健政策や医療計画の参考になるよう、また、途上国の現状に適応させるべく、佐久病院の経験と農村保健のコンセプトを中心に計画したものであり、途上国の研修員や国内研修関係機関の評価を得ている。なお、8月から院内に国際協力事務局ができ、研修計画や調整をおこなうようになり、研修受け入れ体制が強化された。国際協力学習回も3回開催された。

2. 2. 研修フォローアップと JICA 専門家派遣

研修成果を評価すると共に、研修員の現地での活動支援を目標に、研修フォローアップを実施している。次章に述べるフィリピンでプログラムも研修フォローアップとしておこなわれた活動であるが、昨年度は、セネガル共和国保健人材開発促進プロジェクトの地域保健分野の短期専門家として、セネガル政府の地域保健政策作りのための国際セミナーで、日本（佐久）の地域保健についての経験を紹介するとともに、同国からの研修員のフォローアップをおこなうことができた。研修員フォローアップは、調査を兼ねてベトナム、ラオスでも実施した。これらのフォローアップは、研修評価と研修員支援を組み合わせた活動として、佐久病院の国際協力をすすめるための有用であり、効果的な国際協力の進め方に関するスキーム（モデル）としても、意義があると考えている。

2. 3. フィリピンでの保健医療協力活動

2. 3. 1 ベンゲット州の PMHS と CBHPP 活動

ベンゲット州における健康管理活動（PMHS）は、5年目を向かえ、タバオ、クバ、バクロアンの3村を対象に実施された。PMHSは、JICAの農協強化プロジェクトと連携協力し、ベンゲット州保健当局の支援を得て始まった八千穂村をモデルにした村ぐるみの参加型健康管理プロジェクトである。平成18年には、ベンゲット州での保健医療協力のカウンターパートである、タク農協とカパンガン町が、上院議員を委員長とする政府関連のCLPA委員会（Cooperative LGU Partnership Award：農協と自治体の連携協力賞委員会）から優秀団体に選ばれて表彰された。町保健センターによる、年1度の村ぐるみの集団検診、タク農協や保健ボランティアと住民参加によるCBHPP、既存の村落薬局（BB）との連携強化などが組み合わされた活動である。町、村、農協などが協力しておこなってきたこれらの活動が評価された。（写真）

2. 3. 2 マウンテン州パラセリス地区での巡回型集団検診活動

マウンテン州は、ベンゲット州の北隣の山岳地帯に位置するが、2004年より、パラセリス地区保健センターと協力して、農村保健研修のフォローアップ活動として開始された。パラセリス巡回型農村保健プログラム（Community Health Outreach Program in Paracelis：CHOPP）と名づけたこのプログラムは、パラセリス保健センターで行われていた月一回の“出張診療”をベースにして考案されたプログラムである。

従来の出張診療に準じて簡単な治療を実施する一方、健康教育と保健指導を実施し、パラセリス保健センターによる独自のローカル医療保険（Peso for Health Insurance：PHI）を推進し、さらに農協による薬剤回転資金制度を利用した村落薬局（Botika Binhi：BB）を開設して住民の薬剤に対するアクセスを容易にするなど、きわめてユニークなプログラムである。巡回検診は、町保健センタースタッフにより、パラセリス地区内の全10

バラングイで定期的実施されている。P4Hメンバーも加入者が7000人をこえた。また農協による村落薬局も運営は順調に進展し、パラセリスと隣町のナトニンで3農協が正式な薬局を開設し、現在3薬局と15の村落薬局（Botika）が運営されている。CHOPは、昨年度のマウンテン州保健局に続いて、保健省コルディレラ局（DOH-CAR）より最優秀活動賞を受けた。平成18年度からは、フィリピン UNFPA と連携してリプロダクティブヘルス関連の活動を協力しておこなっている。これらの活動は、部分的ではあるが、マウンテン州内の他地域にも、普及し始めている。これらのフィリピンでの諸活動は、平成18年10月、パラワン島で行われたフィリピン全国農協大会でも紹介した。

2. 4. 国際医療協力研究

途上国における社会開発技術、地域保健システム強化に関する国際医療協力研究班（建野班）に参加して、病院と地域との連携強化をテーマに研究をおこなった。初年度は、日本、フィリピン、ベトナムで、保健ボランティアや地域保健活動に関する基礎調査をおこなったが、平成18年度は、これらの調査を、ベトナム、ラオス、フィリピンで継続した。フィリピンでは、相互扶助型地域医療保険（SHIP）と3町の村落薬局（Botika）に関する実態調査を実施した。初年度の保健ボランティアに関する研究成果の一部は、第55回日本農村医学会で発表した。地域保健システムを強化し、基礎的な保健サービスを包括的且つ効果的に提供するために、どのように保健医療機関と地域との連携を進めるか、途上国に適応可能な方策を研究し、提言するのが目的であるが、研究活動を通じて、これらの国における諸活動のモニタリングや研修員の指導助言も実施している。

3. 今後の活動方針

佐久病院国際保健医療科は、研修受け入れとそのフォローアップ、フィリピンでの保健医療協力の実績など、農村保健・地域医療分野の国際協力活動を進め、その役割を果たしてきた。研修受け入れを通じて、JICA や国立国際医療センターなど、国内機関との連携も強化されてきている。研修員とのネットワークも構築されつつあり、平成17年から参加している、“途上国における開発・地域保健システム強化に関する研究班”の調査研究活動も、このネットワークを活用した結果である。コミュニティーヘルスは、JICA 理事長の緒方貞子氏の言う“人間の安全保障”の基本を担う分野であり、この分野の協力は、今後の国際保健医療協力に欠かせない。佐久病院の理念には、国際協力が掲げられている。研修とそのフォローアップを通じた国際協力は、効果的な国際協力のひとつのモデルであり、佐久病院の国際協力の理念に恥じないものである。しかし、これまで培った400名を超える世界中研修員のネットワークを活用して、今後、このモデルを発展継続させようかどうかは、佐久病院が、人的にも経費的にもどれだけ具体的にコミットできるかどうかにかかっている。

（国際保健医療科 出浦喜丈）

図1：佐久病院への海外からの研修・視察者の推移

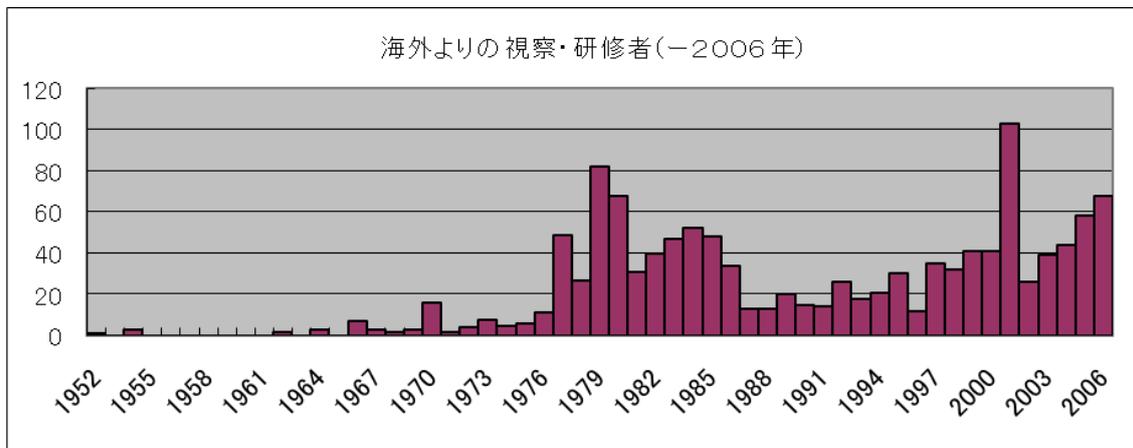
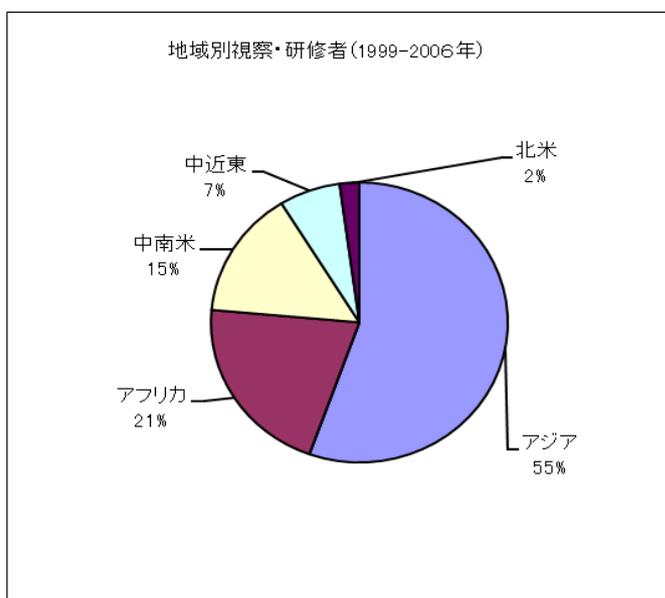
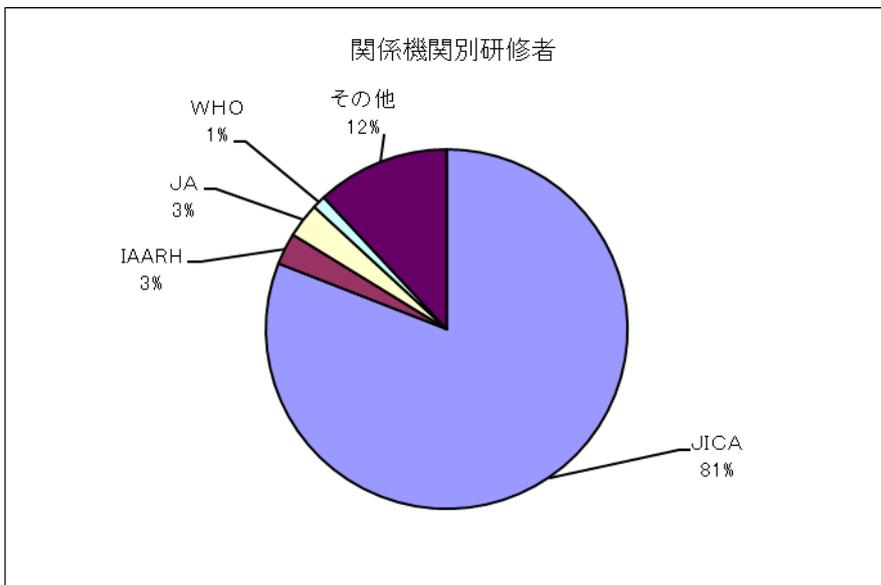


図2：地域別視察研修者の割合（1999-2006年）



関係機関別研修員 :



フィリピン議会上院での CLPA 授賞式

